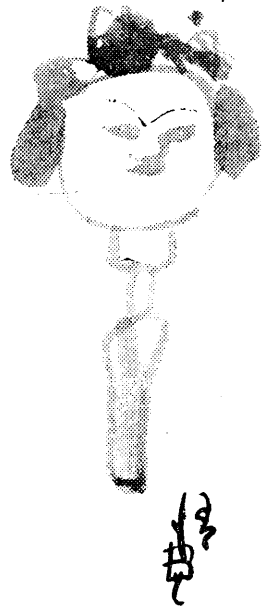
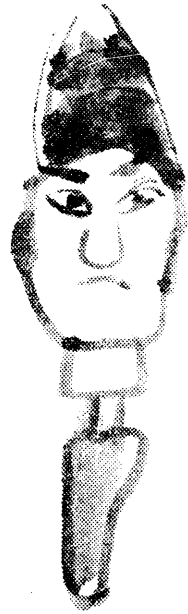


藝 道

片 山 博 通



能は若年より老後まで習ひ徹るべし。命には終あり。能には果あるべからず。

(世阿彌)

藝道といふやうな大きな問題を、簡単に、しかも要領よくまとめあげるなどといふことは、私にはとても出来ないが、ごく漠然とした所感——いはゞ、自分は藝道について、こんな考へを抱いてゐる、かう信じてゐるといつたやうなことを、少しばかり書いてみようと思ふ。



藝道といふ言葉は、自己の學んでゐるといふか、歩んでゐるといふか、その藝——勿論、廣義に解釋して、あらゆる技藝を包含する——その藝と、人生最大の目的である道義的觀念とを合致させた意味を有するもので、云ひかへれば、自己の志して

ある藝は、即ち天から授けられたものだと思ひ得、それを一生の目標として、この大道を濶歩して行くことに意義があるのであらう。自然、多分の宗教性が加味されてをり「心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や守らん」といつた風な心が、藝道の理想境とされてくる。つまり、誠を盡すといふことが、藝道の生命なのである。従つて、誠のない藝は、小手先の技巧・技術でしかなく、眞に藝道とは稱し得ない。外國語の直譯である、藝術といふ言葉があるが、これは丁度、それに相當する。さうまで深く考へずとも、藝道——藝術といふ二つの文字を並べた場合、藝術といふ文字からは、何となく小さなものを感じ、藝道といふ文字からは、何となく大きな、漠としたものを感じる。こゝに、道といふ字が附加された價打があるのであり又、日本人的感情が働いてゐるのである。例へば、武士道といへば、平時、非常時の區別なく、武士としての自分を盡すべき大道である——といふ風に、非常に重大な意味を覺える。劍術といふのも同じことで、それを劍術と云へば、勝負に勝つことだけを問題にした、小さな技術だけになつてしまふ。劍の精神とは、そんなものではなく、劍を生命として、人生の理想に究き進むべきものであるから、その含蓄味は、劍道といふ文字によつてこそ、残りなく表現せられるのである。その他、茶道といひ、能樂道といふ如く、何々道といふ言葉は、その藝の持つてゐる、眞の匂ひを表はしてゐるばかりでなく、より大きい、より強い、より深いものを、はつきりと感得させるのである。



元來、藝道といふ言葉に於ける、道といふ文字の觀念は、支那の儒教的思想から發生したものであらうが、一度日本にわたると、わが肇國以來の大精神たる、神ながらの道といふ思想が加はり、藝道といふ言葉の内面に、根強く日本精神的なものが喰ひ込んで來たのである。この國民的な感情を説明するために、上代に於ける文藝作品、萬葉集に例をとつてみよう。萬葉集の時代といへば、支那から、漢學を初めとして、色々の文化が、一時に殺到して來た時である。さうして、その吸收に大童の體だつたが、やがてこれ等を母胎として、日本文化といふものを確立させて行つたのだつた。大體、かうした支那文化の全盛期でありながら、あの萬葉集の各作品には、毫も支那思想に煩はされてゐるところがない。全く不思議だとさへ云へるのである。柿本人麿の如き、眞に日本的な神の觀念を明かにし、國家を讃へ、天皇を仰ぎ奉り、民族の成長發展を力強く歌つた人は云ふまでもないが、山上憶良の様に、漢學の素養を持ち——この人は支那へ渡つたこともある——儒教的道德、哲學に造詣の

深い歌人でさへ、これらを鵜呑みにはせず、國民的な感情をもつて、切々たる調子の歌を詠んでゐる。その外、防人の歌は申すに及ばず、或は相聞の歌に至つても、徒に辭句の遊戲に終ることなく、はつきり、日本人としての感情を歌にしてゐるのである。いはゞ全篇みな、ますらをぶりの歌で充満してゐるのである。その藝術的價值に於ては、現代までの數多い歌集を通じて、その最高峰にあることを云へば、十分であらう。なほ萬葉集時代については、もう一つ大切なことがある。それは日本の言葉を、支那から輸入したばかりの外國製文字を利用して書きあらはしてゐることだ。これらの文字は、やがて片假名を生み平假名を生むのだが、速やかに、鮮やかに、日本化してしまふのである。その後、漢字交りの文章を書くやうになつてからは漢字は支那の文字ではなく、全くの國字として躍動してゐるのである。この外、飛鳥時代の佛像を見ると、まだ支那の模倣であるが、天平（奈良朝）時代になると、もう日本的な美しさが、隨所にあらはれて來てゐる。かうした事柄は、ほんの一例に過ぎないが、日本民族は、外來の文化・思想等々、そのすべてを、たくみに、而も堂々と日本的に建設することを知つてゐる民族である。少し話が横道へそれたが、かうした例でも分る如く、藝道といふ文字から、全然、支那めいたものを感じないのはあたりまへの事かも知れない。むしろ藝道とは、大和民族のみが誇り得る藝の世界であるとさへ思はれるのだ。事實、藝をかうした意味に解釋し、實踐してゐる國民は、外の國には見當らないのである。



藝道に誠を致すといふことの第一歩は、藝の鍛錬である。鍛錬のないところに藝道の存在しやう筈はないから、一にも鍛錬二にも鍛錬……つまり藝道修行とは、鍛錬に外ならないのであるが、口で云ふほど簡單には實行出來ない。先人達が本當に脂汗を流し、血のにじみ出るやうな修行を重ねて來たことは、誰でもよく心得てゐるが、さて自分がその中へ飛び込んでみると、中々そこまで修行が徹しない。中途半端で嫌氣がさしたり、もうこのくらいで一通りは判つたから、といふ氣持になつてしまふので、眞の修行鍛錬に志すには、よほどの決心と覺悟がなくてはならない。この頃の言葉で云へば「撃ちて止まむ」の決意と實踐がなければ、この目的を貫徹することは出來ない。然し一體、何を目標として勉強するかと云ふと、先づ、先人達の残した藝道の型を學ぶのである。先人の型を習得することは、その型の心を知ることである。最初はその型を鵜呑みに眞似やうと努力するが、何時か知ら平氣でその型がやれるやうになり、さうなれば次第々々に、その型の心持が分つてくるやう

になる。その心が分らないうちは、まだ――鍛錬不足であつて、そこまで行つて始めて、先人達と同じ場所に立つことが出来るのだ。格に入つて格を出づ、といふ言葉は、この境地をさすのである。然し藝道修行では、教へてもらふといふ觀念では駄目で、何事も覺えやう、悟らうといふのでなければならぬ。師匠からたゞかれ／＼て、次第々々に工夫する氣持が生れてくる。さうしてそれが、正しい工夫（命）明に導かれるところに、日本式の修行法がある。いはゆる自悟自得である。こゝまで來れば、先人の型や型の心が、はつきりと會得出来る筈だ。實は、此處に到つたことが、藝道では、まだ第一線に過ぎないのである。かやうに鍛錬に鍛錬を重ねて、四十・五十の年輩になると、大體、この位置に立つ譯だが、こゝをもう一步踏み出すか否かど、平凡人で終るか、達人になるかの境であらうと思ふ。この頃になると、もう肉體の衰へが見えはじめ、そろ／＼老境に近づくため、一見したゞけでは、それが藝のわび、さびのやうに思はれる。不思議なことに、たとひ眞のわびでなくとも、若い人の藝達者では、このわびには絶対に勝つことが出来ない。云ひかへれば、藝といふものは、年功を積まなければ、光が出て來ないものだから、そのため、年功さへ積めば、先づ一通りの格好だけはつく。それで、えせわびであつても、あの藝は枯れてゐるなどと、一應の評判がよいので、心にゆるみが生じる。その上、この年輩になれば、人生行路の上でも、一通りの疲勞を感じてゐるから、若い者のやうに、何くそ、といふ元氣や反撥心が起らず、する／＼と老い朽てしまふ。勿論、藝も自然と涸んでしまひ、それつぎりの一生といふことになる。若い間の嫌氣や慢心が第一の危期なら、これは第二の危期である。



今云つた、眞のわびといふのは、肉體からくる衰へに發するものではなく、修行鍛錬の結果から生れる藝の光に、くすびが加はつたもので、世阿彌の言葉で云へば「眞の花」のことであるから、このわびを身につけ、達人とも上手とも云はれる地位に到達するには、何うしても、青年期・壯年期に於ける徹底的な鍛錬が物を云ふ譯だ。然し先に云つたやうに、若い時分には嫌氣がさしたり、慢心したり、色々と内部・外部からの障害が起つて、頓挫することが多いが、そのためには、藝道に己れの一身を捧げる氣持がなければ駄目だ。いはば、修行とは藝と人との血みどろな戦ひであるから、實戦は勿論のこと、思想的にも敗北してはならないのである。といふのは、己れの歩む道に、絶對的な自信を持たなければならぬといふことであつて、常に邪念が交つてゐないか、信念がぐらついてはゐないかを反省してみる必要がある。反省といふのは、このためばかりでは

なく、正しい鍛錬を行ふためには、是非とも必要な事柄である。いはゞ反省は鍛錬のものさしであると云へる。花やかな人氣にひかされて慢心するのは若い時分のことであるが、それを正氣に戻すのは、この反省といふものさしである。藝道に於ける慢心といふのは、救ふべからざるもので、丁度爆彈のやうなものだ。これにやられたなら、今までのものが根底から打ちくたかれてしまつて、あとかたもなくなくなつてしまふのだが、反省だけが、これを引きとめてくれるのだ。先に云つた、第二の危期を救つてくれるのも、この反省である。事實、反省ほど自分といふものを、よく認識させてくれるものはない。つまり自分を認識すること、即ち己の藝位を知るといふことは、藝の向上に外ならない。何故なら、藝位を知らないものに、藝の向上はあり得ないからだ。世阿彌は花鏡の中で「是非初心不可忘。時々初心不可忘。老後初心不可忘」といふ言葉で、この反省について説いてゐるが、たゞ初心忘るべからずと云つてゐるのではなく、是非、時々、老後と三句重ねてゐる所に、非常な含蓄があるのであつて、私は、これこそ藝道に於ける金玉の文字だと思つてゐる。



長い苦難の道をたどつて、やつと達人の域に達したとしても、まだ上手といふ段階が残つてゐる。名人といふ最高の境地もある。藝道とは、かくの如く遙かに遠いのである。かうした茨の道を、瞬時の休息もなく分けのぼつて行くのが修行であるから、上手・達人の地位にも達しないまゝに、壽命のつきてしまふ不幸な人が、數知れず澤山にある譯だ。先日も、二三の友人と、現在生きてゐる人達の間で、誰が聞いても文句のつけやうのない名人を、各其藝界から指を折つてみたのだが、たつた十人を數へるのに非常な努力を要したことだつた。名人とは萬人に一人と云ふが、實際には千萬人に一人しかないと云ふことになる。このやうな藝の世界を、西洋流の實利主義的尺度で計つたのでは、修行も何もあつたものではない。これほどの無駄骨は外にあるまいと思ふ。それなのに、藝道に志す者が少しも跡を絶たないばかりか、次から次へと、この道に、喜んで参加してくるのである。何故だらう。自分のために學ぶのではなく、家のためとか、道のためとか云ふ信念に燃えてゐるからである。即ち傳統の力である。自分の一生は藝道に捧げ、喜んでその捨石の一つになる決意があるからである。これこそ、眞に日本的な雄々しさであつて、これあればこそ、藝道修行に徹し得るのであらう。先人の道を今の者が行く、その道を又次の者が歩む……この様に、跡から／＼先人の切り拓いた道の地固めをして行くのが、藝道の進み方である。そのうち上手と呼ばれる

人が、先人と同じ地點にまで到達するであらうし、名人と號される人は、一步新しい道を拓いて行くであらう。かく藝の道は遙かに遠く、果しがない。藝道は悠久なり、と云ひたい。然し悠久なればこそ傳統が存するのである。先人の道を正しく歩まうとする努力と、次の代へ、その道を正しく傳へやうとする責任、これが傳統である。この様な絶對的信念が、最初に云つた「藝道の誠」なのである。誠から發する藝能が、即ち藝道だといふのであつて、それが如何に巧妙な藝能であるとしても、誠のないものは、徹底的に嫌惡されたのである。例へば、破門などといふのは、この誠のない藝に對する處罰であつたのだ。

以上で、藝道の三大要素、鍛錬と反省と傳統の大體を云つたのであるが、もう一つ大切なことがある。それは前三者の如き藝道を組みたてる要素ではなく、禁忌とされてゐる事柄である。即ち、言擧げをしないこと、これである。わが國は上代から言靈ことだまの幸ひを信じて來たと同時に、心の誠を表すために、言あげをせずに行ふといふことを、賞揚して來たのだ。即ち不言實行の精神である。この思想が、藝道に於ける倫理性と宗教性とに結びついて、嚴重な禁忌となつたのである。藝道にはべちやくちやと説明することは不要だといふのである。黙々として修行に精進することに貴さがあるのだ。世阿彌の如き、藝道論を書き残した人でも「凡そ家を守り、藝を重んずるによりて、亡父の申し置きし事どもを、心底にとどめて、大概を録す。所詮他人の才覺に及ぼさんとはあらず。たゞ子孫の庭訓にのこすのみなり」と、それは、人に見せるためのものでないことを、はつきりと斷つてゐるのである。私の如き喋々と物を書く者があらはれ出したのは、現代に到つてからの現象であつて、以前には絶對になかつたことだ。今でさへ、藝の世界では、私の如き者を邪道だと云つて輕蔑してゐるのである。尤も千萬でありこれが藝道の本姿なのである。然し藝道を、かくの如く宗教に、道德に結びつけて説明出来るやうになつたのも現代である。つい最近、明治大正の時代は科學萬能の時代であつて、藝能を、この様に融合して考へることは、思想の混亂であると排斥せられてゐたのであつたが、今日の非常時局に際して、あらゆるものが、肇國の大精神に轉換したと同時に、かうした再檢討が叫ばれ出したのである。藝道を民族的に再認識して、わが藝道の偉大さに、今さらながら敬服してゐる次第なのである。

私は、藝道といふ言葉を聞くと、すぐ文樂の人形遣ひ、榮三氏や文五郎氏、さては能樂の梅若万三郎氏等の、默々とした、而も藝に喰ひ入るやうな面魂を聯想せずにはゐられないその緊張した面構からは、決して藝道修行の苦澁をなめつとしたかの如き、凄惨なものを感じられず、何物か、身體一杯に發散する美しいもの、朗かなものを感じさせられるのである。私はこれこそ、藝道の極致、藝と人との完成から生じた風貌であり、鍛鍊を重ね盡したことから生れる精神的美貌であると思つてゐる。こんな不敵な面魂、雄々しい容貌は、丁度、戦場に於ける勇士のそれと好一對をなすもので、これを各藝道中の名人たちからは、苦もなく見出すことが出来るが舞臺や高座で、ふと思ひがけなくめぐあつた時、その藝道修行の過程などが、そとろにしのばれて限りなく愉快な氣持になる。舞臺ばかりではなく、文學とか美術とか工藝とか——廣義に解釋した藝——に、いそしんでゐる老人たちの中に、折節、同じやうな容貌を發見することがある。思はぬ街の隅、田舎の片ほとりで、いはゆる職人と呼ばれる人の間にこの意味の面魂、容貌を見出して、嬉しさに胸を高鳴らすことさへある。何れも先に云つた精神的美貌なのであつて、つまり、藝道の持つ美しさといふ無形のものが、人の風貌の上に、形となつてあらはれ出たものだと思う。かくの如く、藝道の究極は、藝の完成にあるばかりではなく、人の完成といふことにもあるのだ。こゝに藝道の貴さ、偉大さがあるのだと信じる。(昭和十八年三月)

情報局國民演劇

菊吉の『菅原』に授賞

情報局では昭和十七年度の情報局國民演劇受賞作品を左の如く決定、去る三月廿七日首相官邸に於て授賞式が舉行された。今回參加したものは八劇團、七演目で、最優秀作品として菊五郎一座吉右衛門一座合同上演になる「菅原傳授手習鑑」を挙げ、これに情報局總裁賞を贈つたが、これに次ぐ情報局賞は該當するものがなかつたため、全參加劇團の本催しの趣旨に應へんとする熱意精進に對し獎勵の意味を以て獎勵金を贈つてこれに代へた。

情報局總賞(賞金三千圓)

尾上菊五郎一座、中村吉右衛門一座合同上演「菅原傳授手習鑑」(十八年一月歌舞伎座)

獎勵金(各五百圓)

▽井上演劇道場上演、眞山香果作、田島淳演出「岩崎谷」(十八年一月明治座)

▽古川緑波一座上演、菊田一夫作並演出「交換船」(十八年一月有樂座)

▽藝術座上演、阿木翁助作、水木久壽雄演出「當陽舍の人々」(十八年三月有樂座)

▽前進座上演、久保田万太郎作並演出「雁とつばめ」(十八年三月明治座)

▽松本幸四郎一座上演、吉田絃二郎作並演出「忠靈」(十七年十月歌舞伎座)

▽曾我廼家五郎一座上演、「堺漁人作、曾我廼家五郎演出「千利休」(十七年十月新橋演舞場)